

出エジプト記3章「炎の出会い」

1A 聖なる主の現れ 1-6

1B 霊の鍛錬 1

2B 聖なる方 2-6

1C 燃える火におられる神 2-3

2C 主の呼びかけ 4

3C 主への畏敬 5

4C 父祖の神 6

2A 不足を補われる方 7-14

1B 贖いの計画 7-10

1C 痛みを知る主 7

2C 乳と蜜の流れる地 8

3C 神の派遣命令 9-10

2B モーセの訴え 11-14

1C 能力 11-12

1D 小き者 11

2D 共におられる方 12

2C 権威 13-14

1D 神の名 13

2D 「わたしはある」 14

3A これからのご計画 15-22

1B 主の御名 15

2B 父祖たちへの約束 16-17

3B 神の不思議と力 18-20

1C 聞き従う長老たち 18

2C 強いられるファラオ 19

3C エジプトへの災い 20

4B 神の備え 21-22

1C エジプト人の好意 21

2C 主の幕屋への備え 22

本文

出エジプト記3章を開いてください。私たちは出エジプト記から、特に前半は、「神が世から私たちを贖われる計画」について読んでいっています。出エジプト記を選んだのは、私たちが毎日、接

しており、面している世の中において、どのようにキリスト者として生きるべきなのかを知ることができるからです。

私たちは前回、モーセが水の中から引き出されて、ファラオの娘の養子になったところを読みました。そこで私たちは、「アイデンティティー」というものを見ました。自分が一体何であるのか、という意識です。「個」と言ってもいいでしょう、いわゆる個性というものとは違います。自分が自分であること、それを決めるものです。モーセは、ずっとエジプトの宮廷に生きていました。そこで一流の教育を受け、言葉や力に優れていました。そしてエジプトの富や華やかさがありました。けれども、彼は、それらを、ある意味で塵芥と思いました。自分はエジプト人であったけれども、それ以上にイスラエル人だったからです。イスラエルの神を信じるヘブル人であることを、彼は知っていました。

そのために、彼は四十歳になった時に、エジプト人に虐げられていたイスラエル人を見て、彼を助けようとして、そのエジプト人を殺してしまいました。そして次は何と、イスラエル人が他のイスラエル人を虐げていて、それで戒めたら、「自分たちを支配する気か？」と言われて、さらに、その殺したことがばれていました。それで、ファラオはモーセを殺そうと思いましたが、彼はそれをもよとして、ミディアン人のところに逃げて行ったのです。ここに、モーセは「エジプト人として生きていたけれども、実はイスラエル人であり、その民が苦しむのであれば、私も共に苦しむ。エジプトの富や栄華よりも、キリストによって与えられる報いは比べ物にならないほど大きい。だから、エジプトの富を捨てて、キリストの苦しみにあずかるほうが優れているのだ。」と考えたのです。

つまり、「自分はこの世に生きているけれども、れっきとしたキリスト者なのだ。」というアイデンティティーを持つことです。それは世から離れることではありません。モーセがエジプトの教育を受け、エジプト人として育てられたとて、それでもイスラエルの民に対する神の思い、キリストの思いを共有したのです。

1A 聖なる主の現れ 1-6

3章は、モーセが神からイスラエルを救う指導者として召されるところを読みます。

1B 霊の鍛錬 1

1 モーセは、ミディアンの祭司、しゅうとイテロの羊を飼っていた。彼はその群れを荒野の奥まで導いて、神の山ホレブにやって来た。

前回お話したように、モーセはミディアン人のところに行き、そこにあった井戸のところで、羊飼いに虐められていた娘七人を救い出し、彼女たちの羊に水を与えたところを読みました。そして、父レウエル、ここではイテロという別名になっていますが、彼がモーセを呼び、そしてモーセは彼の家に住むことを決めたのです。お嫁さんとしてツィポラが与えられていました。生まれた子は、

ゲルシヨムと名づけ、そこには「寄留者」という意味合いが含まれています。自分はここにおいても寄留者であり、ここは故郷ではないということを告白したのです。

そして時は、ほぼ四十年が過ぎています。モーセがエジプトに戻る時は 80 歳になっていて、モーセがエジプトから出て行ったのが 40 歳だったからです。彼はほぼ四十年の間、なんと羊飼いと暮らしていました。しかも、自分自身の羊はなく、未だ父の羊を飼っていたのです。そこで彼は何を学んだのでしょうか？彼はすでに、神から学問や知識について学び機会をエジプトで与えられていました。しかし今、モーセは四十年をかけて、霊的な備えを受けていました。それは、自分は無力であるということでしょう。以前は、エジプトの宮廷にいるのだから、イスラエル人を救えると思っていたことですが、それが見事にできませんでした。

そして忍耐を学んだことでしょう。羊であります、羊を飼うことは、ちょうど 2-3 歳の子を飼うようなものです。いつも注意が必要で、世話が必要です。ダビデも羊飼い出身でしたが、彼も王になる時に羊を飼うように治めたことを詩篇 78 篇に書いてあります。「78:71 -72 乳を飲ませる雌羊の番から彼を連れて来て御民ヤコブをご自分のゆずりの民イスラエルを牧するようにされた。彼は全き心で彼らを牧し英知の手で彼らを導いた。」そして、忠実に舅に仕えました。このような、自分が成熟するための霊的な訓練をここで受けていたのです。知識は必要です。けれども、神は私たちが意図せずとも、霊的な整えをしてくださいます。

そして、「彼はその群れを荒野の奥まで導いて」とあります。ミディアン人は、シナイ半島の東の地域と紅海のアカバ湾を挟んで、アラビア半島のほうに住んでいました。ここはシナイ半島の東の地域ですが、この時は不思議にも「奥まで」導かれているとあります。これは西側のことです。彼はシナイの荒野の奥に、西のほうに導かれました。それが、後にモーセが主に仕えることになる、「神の山ホレブ」であります。シナイ山とも呼ばれるようになる、山です。ホレブとは「荒野」という意味だそうです。ここに神が現れてくださいます。

興味深いことに、主が用いようとする者たちは、自分が日常の仕事をしている時でありました。ギデオンは、酒ぶねの中で脱穀をしていました。サムエルは、幼い時に幕屋の中で祭司エリのお手伝いをしていました。ダビデは、羊を飼っていました。エリシャは、耕作をしていました。使徒たちは、漁をしており、網を繕っており、またマタイは取税人の台の前に座っていました。こうやって、日頃から動いている人、仕えている人を、その仕えているところで主が呼ばれます。

2B 聖なる方 2-6

1C 燃える火におられる神 2-3

2 すると【主】の使いが、柴の茂みのただ中の、燃える炎の中で彼に現れた。彼が見ると、なんと、燃えているのに柴は燃え尽きていなかった。3 モーセは思った。「近寄って、この大いなる光景を

見よう。なぜ柴が燃え尽きないのだろう。」

主の使いが現れました。創世記の時から現れていましたが、主の使いが現れると、必ず主ご自身が語られます。4 節に、主ご自身が語られます。ですから主の使いが来るということは、主ご自身が来るのと同じだったのです。けれども、同一人物ではありません。確かに異なる存在です。そこで、多くの聖書学者は主の使いを、まだ受肉する前のキリストご自身であると言います。

ここで大事なのは、「燃える炎の中で彼に現れた」ということです。主はこれから、炎の中で現れることが多くなります。シナイ山において、稲妻や雷が落ち、煙が立っていました。そして、幕屋でアロンの息子が異なる火を捧げたら、主の前から火が出てきて彼らを焼き尽くしました。エリヤが、バアルの預言者と対決して、祭壇に火が降るように祈ったら、ことごとくいけにえを主は火によって焼き尽くしました。そして、エゼキエルが見たケルビムの幻は、炎に包まれていました。ヘブル 12 章の最後に、「私たちの神は焼き尽くす火なのです。(12:29)」とあります。火というのは、私たちにあらゆる便益を与えます。光を与え、暖かさを与え、料理を調理し、日光浴は癒しも与えます。主は恵みに満ちた方です。けれども、この方には決して近づくことができません。近づけば、焼き尽くされてしまいます。したがって主は、聖なる方であり、裁き主であります。

私たちも、この世に住んでいて、モーセのように主に引き寄せられる瞬間があります。主ご自身に引き寄せられ、そして主にお会いする時に、火に表れている神の聖さに触れ、ひれ伏すのです。

2C 主の呼びかけ 4

4 【主】は、彼が横切って見に来るのをご覧になった。神は柴の茂みの中から彼に「モーセ、モーセ」と呼びかけられた。彼は「はい、ここにおります」と答えた。

主が、モーセを呼ばれます。二度も呼びかけておられます、「モーセ、モーセ」と。主は、同じことをサムエルに対しても行なわれました、「サムエル、サムエル」(1サム 3:10)。そして、パウロを召される時も、彼の名はその時はサウロでしたが、「サウロ、サウロ」と呼ばれました(使徒 9:4)。名指しで呼ばれ、そこには神の親愛が込められています。個人的に読んでくださいます。そして、モーセも、今あげたサムエルも、パウロも、「はい、ここにおります」と答えました。しもべの姿勢をここに見ることができます。しもべとは、自分が何をすることにしても、いつも主人の言いつけを守る姿であります。自分が何をするかしないか、ではなく、「はい、ここにおります」と待っている姿です。

3C 主への畏敬 5

5 神は仰せられた。「ここに近づいてはならない。あなたの履き物を脱げ。あなたの立っている場所は聖なる地である。」

主は、近づいてならないと言われ、また履き物を脱ぎなさいと言われているのは、そこが聖なる場所、畏敬と尊敬が必要だということですね。アジアの人であれば、履き物を脱ぐのはその家の人たちに対する尊敬の表れであることは、よく知っています。「聖なる地」とあります。それは、聖なる神がおられるからです。聖というのは、別たれたということであり、汚れや被造物から別たれて、超絶していると言ったらよいでしょうか。私たちが、世においていかに信仰を保てるか？というのは、どれだけ聖なる神の前に出ているか？ということに関わるでしょう。主のために何をするか？ということ以上に、主の前にそのまま出てきているか？ということです。

4C 父祖の神 6

6 さらに仰せられた。「わたしはあなたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」モーセは顔を隠した。神を仰ぎ見るのを恐れたからである。

主はモーセに、父祖、族長であるアブラハム、イサク、ヤコブの神として現れました。四百年ぐらいのこと、ずっとその姿を現しておられなかった方が、すぐ目の前に現れてくださいました。私たちが、アブラハムの神と聞けば、それはアブラハムの生涯そのものを導かれた神であることを知ります。その神が導かれているのだから、モーセをも導かれます。同じようにイサクです。イサクは、神の相続の地を離れてないで、それで祝福されました。またヤコブは、どんなに苦勞しても共におられた方として、そして十二人の息子によって十二部族を生み出した父祖として、その生涯を終えました。彼らはそれぞれに、欠点がありました。しかし、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさらなかったと、ヘブル書 11 章にあります。主が、ご自分の恵みによって私たちに関わってくださる時に、このようにして、私たちの神と呼ばれることを恥としないで、むしろ誇りとしてくださいます。

そしてモーセは、顔を隠し、神を仰ぎ見るのを恐れています。私たちが、生活を歩んでいる時に、いかに礼拝が大切かを思います。聖なる方の前に出て、そこで主への恐れを抱き、この方の前にひれ伏すということを、主はこの時から実に永遠の将来に至るまで、ご自分の民に行うようにさせます。シナイ山に現れた時も、幕屋においても、神殿においても、そしてイエス様の前で弟子たちはオリーブ山でひれ伏しましたし、そしてイザヤ 2 章には、終わりの日のエルサレムで全ての民が主から教えを聞くために参拝します。そして、新しいエルサレムでも、御座に神と小羊がおられます。礼拝がいかに大事であるかを思います。日毎に、主の前に出る、デボーションの時がいかに大事であるかを思います。静かな時、聖なる方に触れる時が、しかも日常生活の中ですぐ隣に、そういった空間が必要なのです。

2A 不足を補われる方 7-14

1B 贖いの計画 7-10

1C 痛みを知る主 7

7 【主】は言われた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみを確かに見、追い立てる者た

ちの前での彼らの叫びを聞いた。わたしは彼らの痛みを確かに知っている。

主が、ここからモーセをイスラエルの救いのために召し出されます。初めに、主が彼らの苦しみを確かに見ている、彼らの叫びを聞いている、そして痛みを知っているとされています。主の民が、このように苦しみ、叫び、痛むのは、神にとって耐え難いことでもあります。私たちの主は、私たちをも、この世において苦しんでいるのを聞いておられます。叫んでいるその声も聞いてくださっています。そして痛みを確かに感じ取っておられます。キリストは、罪はないけれども、弱い私たちを同情できない方ではないことが、ヘブル 4 章 15 節に書いてあります。ですから、私たちは御霊に満たされて、その神の慰めをいっぱい受けないとはいけません。

2C 乳と蜜の流れる地 8

8 わたしが下って来たのは、エジプトの手から彼らを救い出し、その地から、広く良い地、乳と蜜の流れる地に、カナン人、ヒッタイト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人のいる場所に、彼らを導き上げるためである。

主の贖いのご計画です。第一に、彼らをエジプトから救い出されます。第二に、彼らを、「広く良い地、乳と蜜の流れる地に」導かれるためです。乳の表しているものは、もちろん家畜です。豊かな放牧できる地があり、そこで多くの牛や羊を飼うことができるということです。蜜は、蜂が一生懸命、働いていることから、農産物が取れることを象徴しています。つまり、農業が豊かにされている姿です。そういった、約束の地に入ることができるということです。第三に、ここに書かれている先住民を追い出すことです。七つの民ですが、彼らもとても豊かで、発展しており、そして強い軍隊を持っていたであろうと考えられます。遺跡には、カナン人がとても発達した文明の中に生きていた面影が残っています。したがって、奴隷出身のイスラエルであっても、そういった強い民に打ち勝つことができるという約束であります。主は、私たちを世から救われます。そして、約束のものを受け継がせてくださいます。そして、敵に対して大いに打ち勝つ信仰を与えてくださいます。

3C 神の派遣命令 9-10

9 今、見よ、イスラエルの子らの叫びはわたしに届いた。わたしはまた、エジプト人が彼らを虐げている有様を見た。10 今、行け。わたしは、あなたをファラオのもとに遣わす。わたしの民、イスラエルの子らをエジプトから導き出せ。」

主は、時が満ちたと判断されました。イスラエルを救い出す時が満ちました。そして、ファラオの元にモーセを遣わすと命じておられます。主は、弟子たちにも遣わすという命令を出されましたね、「平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わされたように、わたしもあなたがたを遣わします。(ヨハ 20:21)」そして息を吹きかけて、聖霊に満たされることを命じられました。私たちは、世の中にいると同時に、キリストにあって世に遣わされた者たちです。自分自身が、キリストを知ってい

ただために、自分のいるところで召されているということです。

2B モーセの訴え 11-14

さて、モーセがここでそのまま、主の呼びかけに答えているのであれば、ここから4章17節までの部分は飛ばすことができます。モーセは、ここでためらってそのまま従っていません。しかし、その従わずに主に問いかけている中でも、主は寛容になられて、彼に答えておられます。

1C 能力 11-12

1D 小き者 11

11 モーセは神に言った。「私は、いったい何者なのでしょう。ファラオのもとに行き、イスラエルの子らをエジプトから導き出さなければならないとは。」

「私は、いったい何者なのでしょう。」という言葉ですが、モーセは自分がいかに小き者であるかを、嫌となるほど知っていました。自分には、全く能力がないこと、不十分であります。名もない羊飼いです。以前なら、ファラオの家にはいたのですから何とかかなりそうなものですが、今は、絶対に無理です。・・ということを行っています。彼は、その時でさえ一人のイスラエル人も救えませんでした。けれども、主はそのように、ご自身から離れては全く何もできないということを知っている者を選ばれて、ご自分の御業を行なわれます。そのような者だからこそ、神のみに拠り頼み、神から命じられていることを従順に行なうことができるからです。パウロも、第二コリントで自分たちの資格は神から来るのであり、自分自身からではないことを話しました。

2D 共におられる方 12

12 神は仰せられた。「わたしが、あなたとともにいる。これが、あなたのためのしるしである。このわたしがあなたを遣わすのだ。あなたがこの民をエジプトから導き出すとき、あなたがたは、この山で神に仕えなければならない。」

モーセにとって必要なことは、とても単純な真理でした。「わたしが、あなたとともにいる。」であります。主が共におられるという約束が、主に遣わされる者にあります。

イエス様は、なんと言われたでしょうか？弟子たちに大宣教命令を出されました。「19 ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子とせよ。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、20 わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。」(マタイ 28:20)」自分自身でさえ弟子にふさわしいのか定かではないのに、ましてやあらゆる国の人々を弟子にするなんてとんでもないことだ、と思われるでしょう。まさにこれが、「私はいったい何者でしょう。」とモーセが言った驚きなのです。しかしイエス様は続けてこう約束されました。「見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」主がともにいてくださいます。自分

ではなく、主が自分を通して行ってくださるのです。

そして、「あなたがこの民をエジプトから導き出すとき、あなたがたは、この山で神に仕えなければならぬ。」とされています。聖なる主とお会いしたこの山のところまで、民を導きます。言い方を変えれば、主とお会いしたところまでしか、人々を導くことができないということです。自分が知っているイエス様、この方に人々を導くのであれば、自分自身が知っているところに導きます。ですから大事なものは、自分自身がイエス様をどれだけ知っているかにかかってきます。

2C 権威 13-14

1D 神の名 13

13 モーセは神に言った。「今、私がイスラエルの子らのところに行き、『あなたがたの父祖の神が、あなたがたのもとに私を遣わされた』と言えば、彼らは『その名は何か』と私に聞くでしょう。私は彼らに何と答えればよいのでしょうか。」

モーセはさらなる質問をしました。次は、権威です。「その名は何か」と聞かれることでしょうか？とです。なんの権威によって、何の名によってそのようなことをしているのか？ということでもあります。私たちも、自分が語っても、それをどれだけ聞いてもらえるか？といえば、そこにどれだけ力があるのか、権威があるのか？ということになります。

2D 「わたしはある」 14

14 神はモーセに仰せられた。「わたしは『わたしはある』という者である。」また仰せられた。「あなたはイスラエルの子らに、こう言わなければならない。『わたしはある』という方が私をあなたがたのところへ遣わされた、と。」

「わたしは『わたしはある』という者である。」という名であります。当時の人々にとって、名とはとても大切です。その名がその相手が誰であるかを決定します。しかし、そこに何か特定の具体的な名であれば、その名に示されている特徴しか表せません。例えば、学問の神様であれば、学問の分野だけになってしまいます。しかし、私たちの心は偶像礼拝を好みます。自分がまず中心にいて、それで自分に仕えてくれる神々を探しています。いい物が見つければそれに仕えますが、実は自分自身に仕えているのです。

しかし、「わたしはある」ということであれば、そのようなことはできません。何かが必要であれば、それは主ご自身が必要だということです。賛美の歌にありますね、「私たちが必要なのは、イエスだけだ」と。イエスという方が、何か特定の限られたところでしか働かれないのであれば、そんなことを言われたら困ってしまうでしょう。けれども、イエスは、「わたしはある」という名を持っておられる方なのです。主は、パンを求めている人たちに対しては、「わたしは命のパンです」と言われまし

た。どこに行けばよいか分からないと言った弟子たちに対しては、「わたしが道であり、真理であり、命なのです。」と言われました。「わたしはある」という言葉には、私たちは偶像礼拝を許さないものがあります。私たちはただ、主の前に出て、この方がおられるということで、必要が満たされる方です。

そして、「わたしはある」という方は、時を超えておられる方です。過去におられたのではなく、過去におられる、であります。そして将来、いるようになるのではなく、将来、おられる方です。今も、昔も、永遠に、おられる方。つまり、時間を超えて生きておられる方であり、独りで存在できる、自存の方でもあります。イエス様が、「アブラハムの前に、わたしはある」とユダヤ人たちの前で言われましたが、わたしがいたと言われず、わたしはあると言われたのです。それはまさに、イエスがヤハウェなる神だということです。

ところで、太字の「主」という言葉がその名であります。YHVH という子音で成り立っており、ヤハウェと呼ばれるのではないかとされていますが、確定はしていません。ユダヤ人は聖なる名ということで、発音することすら拒否します。アドナイに変えたり、単に「御名」とか言います。

3A これからのご計画 15-22

そこで改めて、主はモーセに、しなければいけないことを伝え、また何を主が行なってくださるか、その計画を伝えられます。

1B 主の御名 15

15 神はさらにモーセに仰せられた。「イスラエルの子らに、こう言え。『あなたがたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、【主】が、あなたがたのところに私を遣わされた』と。これが永遠にわたしの名である。これが代々にわたり、わたしの呼び名である。

主は、父祖の神が遣わされた、そして太字の「主」ヤハウェが遣わされたということを強調しておられます。これこそが、永遠の御名であると。ですから 3500 年ぐらい経っている今生きている私たちにとっても、これが永遠の御名です。

2B 父祖たちへの約束 16-17

16 行って、イスラエルの長老たちを集めて言え。『あなたがたの父祖の神、アブラハム、イサク、ヤコブの神、【主】が私に現れてこう言われた。「わたしは、あなたがたのこと、またエジプトでああなたがたに対してなされていることを、必ず顧みる。17 だからわたしは、あなたがたをエジプトでの苦しみから解放して、カナン人、ヒッタイト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の地へ、乳と蜜の流れる地へ導き上ると言ったのである」と。』

次に主は、モーセがイスラエルの長老たちを集めて、そこでわたしの計画を伝えなさいということを言われています。エジプトであなたがたが受けた仕打ちを顧みる。そして必ず、父祖に約束した土地に導き上ると。

3B 神の不思議と力 18-20

1C 聞き従う長老たち 18

18 彼らはあなたの声に聞き従う。あなたはイスラエルの長老たちと一緒にエジプトの王のところに行き、彼にこう言え。『ヘブル人の神、【主】が私たちにお会いくださいました。今、どうか私たちに荒野へ三日の道のりを行かせ、私たちの神、【主】にいけにえを献げさせてください。』

そして次に、ファラオのところに行きます。そこで、「いけにえを捧げさせてください」とお願いします。三日の道のりでエジプトから出て行かせてくださいというお願いです。これは、カナンの地に連れ上るといふのは程遠い、僅かにエジプトを出るお願いです。けれども、まずここから出発する。ファラオが同意できるであろう、許容できる部分で交渉するということです。

2C 強いられるファラオ 19

19 しかし、エジプトの王は強いられなければあなたがたを行かせないことを、わたしはよく知っている。

モーセの働きの最も難しい部分は、ここです。主は、ファラオが初めから聞く耳を持っていないことを、予め知っておられます。よく知っている、と言われます。では、なぜいう必要があるのか？と思うでしょう。私たちも、もしかしたら心を開いてくれるかもしれないと思うから、御言葉を語るのです。初めから心を開ざして決して開かないと分かっている人に語るのは、気が狂いそうになります。けれども、神は思いを超えたところにご計画を持っておられます。

3C エジプトへの災い 20

20 わたしはこの手を伸ばし、エジプトのただ中であらゆる不思議を行い、エジプトを打つ。その後で、彼はあなたがたを去らせる。

これが目的です、主は、ファラオが頑ななのを知って、強いて出て行かせないといけないようにされます。その間に主は、その頑なさも用いて、あらゆる不思議を裁きという形で行われます。そこに、主の不思議があります。私たちは、こんなことが起こったら主の働きが妨げられると思ってしまふ事を、むしろ主はご自分の働きを促進させるために、ご自分の栄光を現すために行わます。

4B 神の備え 21-22

そして次に出て行く場合に、しなければいけないことを指示されます。

1C エジプト人の好意 21

21 わたしは、エジプトがこの民に好意を持つようにする。あなたがたが出て行くとき、何も持たずに出て行くことはない。

主は、これまでの奴隷状態であった彼らに対して、必要な対価をお与えになろうとされています。まず、エジプトの民に好意を持たせます。主が、神を知らない人々にも好意を与えられます。ダニエルに対して、ネブカデネザルの家来がそうでしたし、エステルに対してもそうでした。私たちは、神が好意を与える方であって、この世においてそれで御心を行なえることを知るべきです。

2C 主の幕屋への備え 22

22 女はみな、近所の女、および自分の家に身を寄せている女に、銀の飾り、金の飾り、そして衣服を求め、それを、自分の息子や娘の身に着けさせなさい。こうしてあなたがたは、エジプト人からはぎ取りなさい。」

主が、はぎとりなさいという言葉が使われていますが、それは彼らに分かり易い言葉を使われているからです。奴隷はいつもはぎとられていました。そして大事なものは、これらの対価として受け取るものは、後に幕屋の材料のために使われるものになります。なので、主は敢えて女たちに、それらのことをさせなさいと、飾り物を付けているエジプト人の女たちから、イスラエル人の女たちが受け取るようにさせたのです。主は、このようにしてすでに彼らが主を礼拝することの備えを、ここで行われておられたのです。これだけ、礼拝が大事だということですね。